



紀平真理子のオランダ通信

第28回

圃場面積90ha、 顧客直送ゼロで有機栽培 Weidsicht農場（1）

プロフィール

1985年、愛知県名古屋市生まれ。南山大学外国語学部スペインラテンアメリカ学卒業後、コンタクトレンズメーカーで国内・海外業務に携わる。夫の駐在帯同で2011年12月からオランダのアムステルダム市に在住。父の家庭菜園を見て農業に興味を持っていたこともあり、すべてにおいて実利的で交渉上手なオランダ人によるオランダ式農業に魅了されたという。

オランダ中部フレボランド州にある Weidsicht 農場を訪問し、Evert Reekers 氏に話を聞いた。土壌改良を施して軽粘土質へ変えた埋立地で有機栽培を行なっている。

同農場では90haの圃場で6〜12年輪作を採用し、ジャガイモ、スペルト種小麦、ニンジン、タマネギ、ブロッコリー、キャベツ、甜菜、ハーブ類などを生産している。収量はジャガイモ・タマネギ・キャベツは慣行栽培の60〜70%、ブロッコリー・ニンジンに慣行の平均程度はあるそうだ。「GM種はもちろん有機栽培用の疫病耐性のある品種もまだあまり信用していない」とのこと。

ブロッコリーは、出荷先の加工会社と品種や出荷量をあらかじめ決定。4〜6月に機械で定植後、70〜100日で派遣ワーカーにより手摘みで収穫作業を行なう。

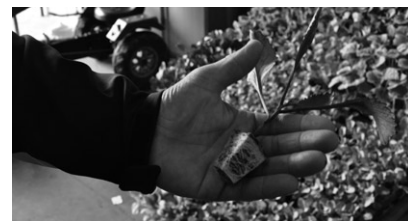
タマネギは3月に苗床3cmの深さに幅4・5m、毎時2・5kmでゆっくり播種。畝間には定期的にカルチベーターをかける。9月上旬に圃場で数日間乾燥して収穫。その後8週間ベンチレーションシステムで貯蔵し、11月には2℃で冷蔵する。「タマネギは貯蔵がポイントだ。貯蔵設備への投資コストは1kg当たり週5セント、最も赤字になりやすい作物なので、同じ販売先との長期契約の



1分間にパラシュートのように60苗落とし、機械で定植している



スペルト種の小麦



キャベツの苗は慣行栽培用の種だが、有機栽培用に育苗されている

ほうがよい。60%はドイツ・フランス・イギリスに輸出している」というのもオランダでは納入価格が下がり続け、一方イギリスは品質と納入日に厳しいが毎年納入価格は一定だ。またドイツは市場価格により納入価格は変動するが契約ベースだ。有機栽培にもかかわらず顧客直送はゼロ、100%卸業者に販売で経営を成り立たせていくためには作物ごとに売り先を常に考えて工夫する必要がある。たとえば甜菜は国内大手製糖工場に納入する場合、作物を洗浄する必要がある、有機栽培では採算が取れにくい。そこで同農場は6haの小規模栽培で、小さいシロップ会社に輸出し、独自の販路を見いだしている。

栄養価が高い古代種で近年需要が増えた。他の有機栽培農家とまとめて業者に販売している。ジャガイモは病害により近隣の慣行農家の感染源になってしまう可能性があるため、コストはかかるが7月のまだ生育しきっていない段階で圃場を焼く。Agrico社より Agriaの種イモを購入し、9月上旬に土塊除去と選別を含む Dewulf社の2畦けん引式ハーベスターで収穫し、Agrico社へ販売する。12年からは Bonte Benheim 種の養豚も始めた。13年よりバリウム代替のカノコソウ、14年から風邪薬代替のエキナセアを薬用として栽培を開始した。ちなみにハーブに関しては契約ベースで納入価格を設定し、市場価格に左右されないで、今後重要な作物になると考えている。

（以下次号）